opusdei.org

黙想:聖ルカ(10月 18日)

黙想のテーマ:「聖ルカはイエスの生涯の日常性を私たちに示している」「いつくしみの福音」「聖母の画家」

2025/10/17

聖ルカはイエスの生涯の日常性を私 たちに示している

いつくしみの福音

聖母の画家

聖ルカは、アンティオキアで生まれました。彼はおそらくギリシャ人で、医師として働いていました。40年頃にキリスト教に改宗した後、パウロの二度目の宣教旅行に同行し、使徒の生涯の最後の時期を、彼とともに過ごしました。彼は「ルカによる福音書」および「使徒言行録」の著者です。

聖ルカは、幼少期の物語を次の言葉 で締めくくっています。「イエスは 知恵が増し、背丈も伸び、神と人と に愛された | (ルカ2・52)。彼は、神 の御子が私たちと同じ人生の段階を 経て成長されたこと、そして両親に 従いながら育ったことを示していま す。もし、キリストの生涯のすべて が、父なる神の啓示であるならば、 「主が隠れてお過ごしになった歳月 は、無意味なものではなく、その後 に来る公生活の単なる準備期間でも ありませんでした。 (…) 信者は主 のご生涯を模範として、主に倣わな ければならないということです。 (…)何年もの黙々とした地味な生活 に大勢の人々が道を見つけるように

イエスのすべての御言葉と御業は、 人類に対する神のいつくしみを明ら

主はお望みなのです」。

かにしています。「キリストの教え のなかのこれらのテーマをとくに取 り上げて書く福音記者はルカで、ル カの福音は『いつくしみの福音』と 呼びならわされるようになりまし た上冠。彼は、イエスが失われた 人々を探し出し、救うために来られ たことを強調し、罪深い女の赦しに ついて語り、ペトロの否認の後に、 イエスが彼をどのように見つめられ たかを描き、イエスを十字架につけ た者たちの赦しを求めるイエスの祈 りと、嘆願を記しています。更に、 聖ルカは、神が私たちに愛を分かち 合うことを常に求めておられること を強調する、三つのたとえも伝えて います。これらのたとえの中で、 「イエスは神の本性を明らかにされ ます。それは、あわれみといつくし みによって、罪から解放し拒絶を砕 くまで、決して音を上げない父親の 本性ですりま

このようなあらゆる詳細の中に、福 音と私たちの信仰の核心を見いだす ことが出来ます。いつくしみに心を 開くことで、善であられる神の無条 件の愛を受け取ることができます。 神はすべてを成し遂げることがで き、私たちをその命で満たしたいと 願っておられます。聖ホセマリアは 述べています。「わたしたちに示さ れる神のいつくしみは、いつも立ち 戻るよう励まします。子どもたち よ、最も良いことは神の傍から離れ たり、神を見捨てたりしないことで すが、人間的な弱さによって神から 離れてしまったなら急いで立ち戻り なさい。神はいつでも放蕩息子の父 親のようにさらなる愛をこめて受け 入れてくださいます | [4]。 キリスト の柔和な姿を記した聖ルカ町のおか げで、私たちは主がいつも私たちを 待っておられることを知っていま す。「神は公正であり、私たちの弱 さを考慮に入れてくださり、私たち の本性のもろさを完全にご存じであ

ると考えると、なんと心が安らぐことでしょう。では、何を恐れる必要があるのでしょうか。どうして、放蕩息子をあれほどまでに優しく赦された限りなく公正な神が、私にも同じように公正を示し、神のもとにいまり続ける私を守ってくださらないことがあるでしょうか」[6]。

ちた応答も際立たせます。聖母は、 天使のお告げを謙虚に受け入れ、神 の計画に身を委ね、民の慣習に従い ました。

聖ルカは幼少期の記述を締めくくる 際に、「母はこれらのことをすべて 心に納めていた」 (ルカ2・51) と記 しています。このことから、聖母が 福音記者ルカの主要な情報源の一つ であったと推測できます。なぜな ら、聖母だけがそのような詳細を語 ることができたからです。この言葉 は、聖母がどのように現実を受け入 れ、常に神を愛そうと努めていたか を示しています。「マリアの如き生 き方ができるための秘訣はまさにこ の愛なのです。その愛に動かされた 聖母は自己を全く忘れ、神のお望み になるところにとどまり、神の御旨 を心込めて果たしたのです。そうで あればこそ、マリアの些細な仕草に 至るまで、取るに足らぬどころか、 非常に大切な意味をもっているので

す」「TI。 私たちの歩む道が、聖母マリアの導きの光によって照らされるように、聖ルカにお願いしましょう。

- [1] 聖ホセマリア『知識の香』20番。
- [2] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』3番。
- [3] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』9番。
- [4] 聖ホセマリア、家族の集いでのメモ、1972年3月27日。
- [5] ダンテ『帝政論』1参照。
- [6] リジューの聖テレーズ、 Autobiographical Manuscripts, no. 8。

[7]	聖ホセマリ	ア	『知識の香』	148
番。				

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/mokusou-sei-ruka/ (2025/11/20)